

量刑判断に対する被疑者の写真の影響

An effect of picture of perpetrator on sentence judgment

中村國則, 神田咲
Kuninori Nakamura, Saki Kanda

成城大学社会イノベーション学部
Faculty of Social Innovation, Seijo University
knaka@seijo.ac.jp

Abstract

Previous studies have demonstrated that pictures enhance valuation by feeling and inhibit valuation by calculation, resulting that they prevent participant to consider numerical information such as number of objects. On the basis of this theoretical foundation, this study hypothesized that pictures of perpetrator affect sentence judgment. To test this hypothesis, we required participants to make sentence judgment seeing pictures or illustration of perpetrator where number of perpetrators was manipulated. Results showed that sentence judgments reflected numerical information more when pictures of perpetrators were shown than when illustrations of perpetrators were shown.

Keywords — sentence judgment, picture of perpetrators, valuation by feeling.

1. はじめに

2009年に裁判員制度が日本に導入されて以来、量刑判断は誰もが行う可能性を持つ身近な意思決定の問題となっている。量刑判断を考える上で問題となるのは、その判断を一般人がどの程度合理的な思考に基づいて行うかという点である。すなわち、裁判員制度に参加する一般人は司法判断については素人であり、そこには本来量刑とは関係しない様々な要因が強く影響しうるからである。実際、これまで被告人の国籍(中田・サトウ, 2014)、量刑の分布(綿村・分部・佐伯, 2014)といった情報が一般人の量刑判断に影響することが報告されており、一般人が量刑判断をどのような基準で下しているか、は適切な裁判員制度の運用のための重要な検討課題となっているといえるだろう。

量刑判断をする際に裁判員に提示される情報には、被害者・被疑者といった当事者に関する

情報が含まれる。その中でも、当事者の写真、特に被疑者の写真といった情報は個人の印象を左右するうえで重要であり、量刑判断にも影響を与える可能性は十分考えられるだろう。では、このような当事者の写真は、量刑判断の評定過程にどのような影響を与えるのだろうか。このような問題はこれまであまり取り上げられなかったものである。

写真や画像が判断に対して与える影響については、Hsee & Rottenstreich (2004)の研究が示唆的である。彼らは思考の二重過程理論(Kahneman, 2011; Stanovich, 2004)に基づき、人間の評価過程を、感情ベースの判断と計算ベースの判断の二過程を区別した。その中で、両者が異なった形で量的情報を反映することを示し、評価対象の画像といった情報が、感情ベースの判断を促進し、評価対象の量的な情報が判断に反映されにくくなることを明らかにしている。

量刑判断を合理的に考えれば、被害者の量的な情報、すなわち被害者の数が影響することは自然であり、逆に感情ベースの判断の影響によってこの量的な情報が反映されにくくなるであろうことは、Hsee & Rottenstreich (2004)の研究からも示唆されるものである。しかしながらも一つここで問題となるのは被疑者の数という量的な情報である。量刑判断の立場からすれば、強盗や殺人といった犯罪の場合には、被疑者の数が多い方が逆に犯罪の残虐性が増すと考えられ、量刑判断が重くなる場合がある。しかしながらこのような原則を一般人がどの程度認識しているかは定かではなく、さらにそ

のような被疑者の数といった情報を感情ベース・計算ベースの評価過程がそれぞれどのように判断しているかはこれまでのところ全く検討されていない。そこで本研究では、被疑者の画像と被疑者の数を操作して、これらの要因が判断に与える影響を分析することを通じ、この問題を検討することを目的とした。

2. 方法

実験計画及び実験参加者

画像要因(画像/イラスト：被験者間)×人数要因(1人/3人：被験者間)の2要因配置計画で行った。実験参加者は288名の大学生であり、2×2の計4条件すべてに72名ずつ割り当てられた。

実験刺激

架空の傷害致傷事件を記述した文章、および被疑者の画像・あるいはイラストを刺激として用いた(Figure 1)。刺激文章は実験者がオリジナルに作成したものであり、(1)被害者が死亡しない等、死刑が該当しない程度の犯罪になること、(2)被疑者に前科を付けないこと、に留意して作成した。イラストも実験者がオリジナルに作成したものであり、Microsoft Office 2010のクリップアートを加工して作成した。



Figure 1. 実験で用いられた刺激の例：(a)は3

人・画像条件、(b)は1人・イラスト条件のものを表す。

手続き

授業を利用して集団状況で行われ、刺激の提示・従属変数の測定はすべて冊子上で行われた。実験参加者は刺激文章・およびイラストをみた後、被疑者に対してどの程度の量刑が適切であるかを①6年～10年、②11年～15年、③16年～20年、④21年～25年、⑤26年～30年の6つの選択肢の中から選択して回答した。

画像あり条件に割り当てられた参加者は被疑者の顔写真を、画像なし条件に割り当てられた参加者は被疑者を表す人型のイラストが刺激文章の下に記載されたものを提示された。画像数・イラスト数は人数要因に対応した数のものが付せられ、3人条件の画像は被験者ごとにランダム化された。量刑判断の評定は、1人条件・3人条件ともに提示された被疑者1人ごとに行われた。

3. 結果および考察

Figure 2に各条件の平均量刑年数を示す。実験参加者の行った量刑判断を従属変数とした画像要因(画像/イラスト：被験者間)×人数要因(1人/3人：被験者間)の2要因分散分析を行った結果、画像要因の主効果($F(1, 284)=6.25, p<.05$)、2要因間の交互作用($F(1, 284)=8.79, p<.05$)が有意となった。

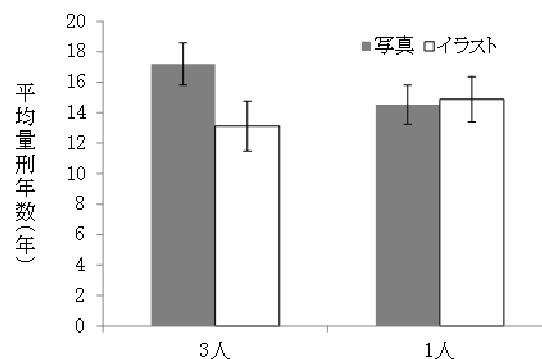


Figure 2 各条件の平均量刑年数：エラーバーは95%信頼区間を示す

以上の結果は、被疑者の写真は量刑判断に対してはむしろ計算による評価を促進する働きを持つことを示している。Hsee & Rottenstreich (2004)では画像といった情報は“感情的に豊か”(affect-rich)と想定され、画像の提示は感情ベースの評価過程を誘発して量的情報をむしろ反映させにくくなることを考え合わせれば、本研究の知見は、被疑者の評価と被害者の評価について、感情の働きが大きく異なることを示唆するものといえる。

引用文献

- [1] Hsee, C. K., & Rottenstreich, Y. (2004). Music, mugger, and panda. on the affective side of psychology. *Journal of Experimental Psychology: General*, 133, 23-30.
- [2] Kahneman, D. (2012). *Thinking, fast and slow*. Farrar, Straus and Giroux.
- [3] 中田友貴・サトウタツヤ. (2014). 被告人の国籍が裁判員の量刑判断に与える影響 / 事件の種類別の観点から. *立命館人間科学研究*, 30, 45-63.
- [4] Stanovich, K. (2004). *The Robot's Rebellion: Finding Meaning in the Age of Darwin*. University of Chicago Press.
- [5] 綿村英一郎・分部利紘・佐伯昌彦. (2014). 量刑分布グラフによるアンカリング効果についての実験的検証. *社会心理学研究*, 30, 11-20.